昔、魔界で無敵と呼ばれた魔法剣士が一国の王となりました

ちゃんこう

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
昔、魔界で無敵と呼ばれた魔法剣士が一国の王となりました

【Ｎコード】
Ｎ９９４０Ｚ

【作者名】
ちゃんこう

【あらすじ】
主人公は、どこにでもいるような学生の振りをしている
その正体は魔界で、漆黒の無双と呼ばれた魔法剣士
ある日、いつも通り学校に登校するが、校門の近くで異変に気付くものすごい数のガードマンがいることに・・・
そして、その中心にあたりには、魔界から逃げ出させてくれた恩人の王妃とその護衛の女騎士団がいた
無視をして、教室に入ったがいいが、最初の授業開始早々王妃が教室に入ってきて、私の王国を助けてくれと言う

主人公は、いくら恩人の頼みでも一度は剣を捨てた
そのことから、一度は断るがドラゴンが現れるとなるとまた、剣をとり王妃を守る
そのことがきっかけでまだ、主人公は現役、いや、むしろ昔より強くなっていることを実感する
そして、王妃は助けだしてくれたら一緒に逃げてきた自分の娘をやると言い出す
主人公はもちろん断るが王妃は全然聞かず、自分の夫、王が病で倒れて新しい王になれと言われ
強引に主人公は戦うことになった
もうちょっとだけ、戦うことを決意して・・・

この、小説は一話ずつ視点を変えたりするのでご了承ください。
一応、前書きで部分で誰視点かを書いたりしますので

一話（前書き）

今回は、神彩剣吾（かみさやけんご）視点です

一話

さて、どうなっているんだ？これは・・・
いつも通り学校に登校しようとしたら、高級そうな車が止まっている
その外にはガードマンが大量にいる
・・・どういうことなんだ？
俺には一つだけ心当たりがあったが、俺はそれを無視し裏側の門から入った

【教室】

「なあなあ、あの高級車なんだと思う？」
友人が話しかけてきた

「さあな、誰かお偉いさんでも来ているんじゃないか？」
「お偉いさんって来るわけないだろう？こんな学力とかいろいろ低い学校に」
「そうだよなあ」
一応話を合わせる
心当たりがあるが、もうそれは考えないことにした

――――キーコーカーコーン
音が割れているチャイムが鳴り響いた

「そろそろ、席に戻ったほうがいいぞ」
「そうだな、戻ることに・・・」

――――ガラ！
教室の扉が開いた

先生か？と思ったが違った

ヴィクトリア＝サーラ

昔、俺を助けてくれた王妃とその女騎士団がそこにいた
ついでに、サーラ王妃の外見は髪はピンク色のきれいな長髪で目は金色、あと背は女性の中で平均的だ
そして、サーラ王妃は俺の近くまで来てこういった

「神彩剣吾（かみさやけんご）・・・お願いです、私たちの国を助けてください」

・・・頭を深々と下げて言った
その瞬間、騒いでいたみんなが黙って・・・すぐ騒ぎ出した

「おい！神彩！どういうことだよ！？」

友人が遠くのから話しかけてくる
頭を下げている人は王妃・・・だから王の妻だ・・・
俺はこの人とちょっとしたこと、て言うか俺を魔界から助けてもらった恩があるから大抵のことには手を貸すつもりだが・・・
また、戦うのだけはごめんだった

「何のことだ？ていうかあんたたち誰だ？」

この平凡でささやかな幸せがある生活を終わらせたくない
だから、俺は知らないふりをすることにした
この方法が一番いい
あっちだって、俺と会うのは7年ぶりぐらいだ
どうせ忘れているに決まっている
だけど、相手は・・・

「いいえ、剣吾・・・いや、またの名を漆黒(しっこく)の無双(むそう)のことは忘れたことはありません」

・・・あちゃー完璧に覚えられているなて言うか、その厨二病くさいのまだ覚えていたんだ
さて・・・どういう風に対応しよう
そう考えている時だった

「王妃様・・失礼ですが本当にこの者が助けてくれるのですか?私にはただの凡人にしか見えませんが・・・」

おお・・・言ってくれるねえ
だけど、ここで反論するとめんどくさいことになるから黙っておくか

「黙りなさい、ミララ。この人はあなたなんか一瞬で倒すくらいの魔力の持ち主ですよ」

ミララって言うのか・・・サーラ王妃の後ろで剣を腰につけ、金髪でツインテール、目は青色の女は

「でも、私には感じることができないのです。この者の魔力が・・・」

当たり前だ、てめえ程度に感じることができたらせっかく抑えているのに意味がねえじゃねえか
ていうか、周りが本当に混乱してきたぞ・・・どうすればいいんだ?これ・・・
別の方法をとろうと考えている時だった
「王妃様!!ばれました!!」

女騎士団の一人が後ろの方で叫んでいる

・・・女騎士団は見たところ5，6人で教室の出入り口をふさいでいる

その後ろの方から声がして・・ばれた？どういうことだ

「お願いです！！助けてください、剣吾・・・」

「だから、なんのこと・・・」

――――ドオオオン！！！！

逆・・・教室の扉とは全く別の方向・・・窓がある方で爆発音が聞こえた

嫌な予感がする

「騎士団！！配置につき、窓を開けろ！！何としてでも、王妃に誰一人近づけるな！！」

ミララは叫んで騎士団を動かす

良い判断だな・・・窓がある、と言うことはガラスがはられている。

もし、そこから破片が飛び散りでもしたらけが人が出る

案外、強いのか？こいつら・・・俺みたいに魔力を抑えていたりして

「・・・隊長！！ドラゴンが・・・」

はあ・・・どうやってきたんだよ！！

警官とか何してんだよ！！って、魔力を持っていないやつに言っても無駄か

多分、姿すら見れてないだろうなぁ。て言うか、クラスのやつら写メとるのやめろ・・・ちゃんとそいつらはそいつらの仕事しているんだよ・・・お前らは見えてないけど！！

周りは変なものを見るような目で見ている
さて・・・この間に逃げ・・・

「ギャアアーーーオオオ!!!」

!!・・・まじかよ!!
俺は教室の出入り口と全く別の窓の方に走った
まさか・・・本当にドラゴンが・・・・いた
しかも、3体いる
まだ、少し遠いがブレスをしたら当たる距離だ
ちょっとやばいか?
騎士団のやつら剣しか構えていない
このままだと、全滅だな
・・・はあ、今回だけやるか

「はあ、サーラ王妃、今だけは助けてやるよ」
「本当ですか!!」
「召喚魔法・・・黒魔の騎士」

俺は7年ぶりぐらいに、黒魔の騎士の装備を召喚した
この召喚魔法は自動的に俺に装着してくれて便利だ。あと、サイズは唱えたもののぴったりのサイズになってくれる。まあ、ならなかったら7年前と同じ・・恐ろしいな高校生が小学生の服を着るようなものになるから、絶対に会わない
ついでに、騎士だから剣もついている。わざわざ剣、単体で召喚する必要がない
まあ、刃がついていないから何も切ることができない剣だけど
ついでに、この装備は魔力がないやつだって見える
おかげで、クラスのやつらは目が点になっている
言い訳できないよな・・・

さて、さっさと終わらせて逃げよう
俺は窓から飛び出した

「おい！！なにやって・・・」

ミララは俺に呼びかけるだけど俺は

「大丈夫だって、俺飛べるから」

そう、俺は飛べる。昔からなぜか俺は飛ぶことができた
その方法を教えて欲しいとよく言われるけど俺は感覚だけでやっている
からその方法を教えても誰も飛べなかった
よし・・そう言えば、この技まだ使えるかな？

「スラッシュ！！」

俺は、技の名前を叫び、剣を振った
この技は、振った剣先から斬撃を飛ばす技だ。ついでに、一番威力が弱い。あと、剣に刃がついていないと何も切れはしない
だから、威嚇程度・・・だけど十分だ
なぜなら、この技も俺しか使えない・・・未知の技を見たら逃げるだろ
そう思ったが、スラッシュが予想より斬撃を強く飛ばしてしまい・・・

「ギャアアオオ！！」

ドラゴン、一体撃墜してしまった

「（やっちまった！！！）」

できるだけ、傷つけたくなかったのに！
ていうか、死んでないよな！？
俺は殺しとかそう言うのは昔からなぜか嫌い・・って言うか血を見るのが嫌だ
だから、俺は刃のついていない剣しか持っていない。昔から
多分打撲程度だと思うんだが・・・
昔と今じゃ、全然違うみたいだな
さっきのスラッシュを見ると

「ギャアアオオ！！！！！」

やば・・怒りだしたか？
でも、ドラゴンが野生でここに来るはずがない・・・多分、ドラゴンに誰かが乗っていると思う
引いてくれるだろうと考えていると同時にドラゴンたちは急旋回し、去って行った
・・・どこから、来たんだ？
魔界の門は人間界でも1個あるかないかだ
その1個がこの王妃様の王国にあったはずなんだけど・・・

「国を助けてくれって言ったよな？王妃様」
「はい」
「何があったか、一から話してくれ」
「わかりました。なら場所を変えましょう」
「助かる」

そう言って、俺達は教室から去った

一話（後書き）

最後まで、読んでくれてありがとうございます＞m（＿＿）m＜
まだまだ、未熟ですが続けていくので読んでいってください
あと、この小説を読んでわかりにくかったところがある場合は感想のところに書いてください。できるかぎり、読者にわかりやすくするために頑張りますので

二話（前書き）

今回は、ララミ＝ミララ視点です

二話

納得がいかない！！
なんで、魔力がないやつが空を飛んだり、ドラゴンを倒したりすることができるんだ！
女騎士団が成立して7年・・・最初からいる私からしてみればこの凡人は不思議すぎる。まるであの時の教官みたいだ

女騎士団は、普通の騎士団と比べて魔力が大幅に高い。女王様を守るのも女騎士団しかできない
そんな名誉ある騎士団なのに、魔力がないやつに王妃を守られるなんて・・・あの教官に顔向けできない

昔、私達の騎士団は子供の遊びで設立された
その男の遊び相手が教官だ。その人は尋常じゃないほど魔力を持っていて、どんなに私たちがくじけそうになっても手を差し伸べてくれた。
その人からしてみれば、ただの遊びだったかも知れないけど私たちからしてみれば遊びじゃなかった

そして、私たちはその遊んだその日の内に王妃様に言いに行き、正式に騎士団となった
私たちはうれしかったけど、教官は騎士団成立を知らない
いつの間にかいなくなっていた。
全員で町の人に聞き込みをしたけど、意味がなかった
まるで鳥のように空に逃げたのかも・・・そんな考えもうかんだりしていた

あれから、私たちは教官に一度もあっていない

そう言えば、一度だけ王妃様に訪ねた時に王妃様はこんなことを言っていたな
『あの人はあなたたちとはちょっと違うんです。だから忘れなさい』って言っていた
あの時の私達にはどういうことかわからなかったけど今ならわかる
私はあの人に恋をしていたんだ。子供だからいろんな感情が入り混じったりしてよくわからなかった
ただ、それだけのことだ・・・もし、また教官に会えたなら伝えよう
『好きです』最初で多分最後の告白を・・・

【神彩剣吾(かみさやけんご)の家　周辺】

・・・デカいな・・・
この凡人、まさかこんなにもデカい家に住んでいるのか？
ぱっと見ただけでも普通の家3軒ぐらいはあるだろう。
金持ち？なら、王妃様が訪ねてきた理由がわかる
経済的投資か・・・しかも、この凡人ドラゴンを撃墜するほどの力があるみたいだ
その力で国を取り返し、そして経済もこのものの金でなんとかするさすがは王妃様だ！！私達みたいなのでは考えようもないことをしてくれる
だけど、違った

「おーい、みんなどっちを見ているんだ？こっちのアパートだぞ。俺の家」

・・・へ？
右側をゆっくりと見ると、古臭いアパートが立っている
どういうことだ？経済投資じゃないのか・

ますます訳の分からないことになってきた
もう、考えるのはやめよう。すべて王妃様に任せたら今は何とかなるだろう
私はそう思いながら、神彩とか言うものの家に入ろうしたが・・・
「待った、待った。こんなにも入ることができないんだこの家」
「なら、どうするんですか？剣吾さま」
剣吾さま！？さっきまで呼び捨てだったのに、王妃様がこの者に「さま」を語尾使う！？
その瞬間、私の何かが行動をさせた
「王妃様！このものに「さま」なんて使わなくてよろしいです！！」
私は鞘から剣を抜き、この凡人の首元に当てた
もちろん、切れるように刃を表にして
「おっと、怖いな」
嘘だ・・・この凡人は全然怖がっていない
その証拠に、剣を突き付けられて笑っている
本当に八つ裂きにしてやろうか？
そんな考えが浮かんでいた
だけど・・・
「やめなさい、ミララ。さっきのこと忘れたのですか？」
そうだ、よくよく考えてみればこの凡人はドラゴンをいとも簡単に撃墜していた
ここで、八つ裂きにしようとすれば逆にやられる

私はそう思い、剣を納めた
「でだ、この人数で人目に付かない場所・・あるんだけどどうする？」
何を言っているんだ？こいつ
そんないい場所があるなら最初からそこに行けばいいのに
「いいですよ、その場所で」
王妃様は答える
そして、この凡人は手を叩き
「扉の魔法・・・ストラム」
その瞬間、凡人に目の前に現れた
その中は、綺麗な緑色が広がる大地だ
「さて、ここに入るにつれて注意があるんだが」
「なんでしょう」
ここはちゃんと聞いておかないとな
仮にも私は騎士隊長、団で隊長っておかしいと思うけど団長は決まっているから私はその下の隊長だ
だから、この団をちゃんと仕切るためにきいておかないと・・・
「ここにいるモンスターに絶対手を出さないでくれ」
「どうしてだ？」
私は率直な疑問を聞いた

おとなしいからか？それとも、毒か何か持っているのか？
でも、どちらとも違った

「いや、単純にモンスターが強いから手を出さないでくれ。撃退するのめんどいから」
「そうですか、わかりました」

王妃様が答える
・・・強いか・・・
まあ、この凡人は魔力を持っていないからどんなモンスターも強く思えるんだろうな
その点、私達女騎士団は大丈夫だろうな
まあ、この凡人が頭を下げて助けてくれって叫んだら助けてやるか
そう思いながら私は扉に入って行った

【神彩（かみさや）　剣吾（けんご）の扉の世界】

なんだ・・・外から見たのと変わりないじゃないか
綺麗な草原が広がっている
香りがいいな・・・すがすがしい気分になる
ずっとここにいたいなあ。そんな気分になってきた
周りを見ると全員目を細めている。この気分を味待っているのだろうだが、2人だけ違った。凡人ともう、1人新人の女騎士だけが目を見開いて周りを注意深く探っている
こんなところに注意するものなんてないだろ。現に王妃様も目を細めている、いつも注意深いのに・・・
そう考えながら私は目をつぶった

三話（前書き）

今回は、ヴィクトリア＝ミーナ視点です。

三話

え！？え？
なんでみんな知らない土地にきて、そんなに警戒心なくいれるの？
ましてや、注意されたばっかなんだよ？
その人は私と同じで周りを警戒しているみたい
なんだろう・・・私、この人のこと知っているのかな？

最初に会った時から何か、懐かしいものを感じる
でも、気のせいよね、ずっと可愛がられていた私、サーラ母様の娘
ヴィクトリア＝ミーナ
外にも出たことないのに、知っているわけないじゃない

「なあ、お前名前なんていうんだ？」
「！？」

突然、話しかけられた
な、名前・・・そう言えば、まだ自己紹介していない。でも、自分がサーラ母様の娘っていうのは伏せておこう
まだ、この人を完全に信用したわけじゃないのだから
しかし、どうする？名前を変えるのも抵抗がある
どうしよう・・・

「あ、別に話したくないなら話さなくていいぞ？今、お前だけがまともだったから話しかけているだけだしな」
「え？」

私は目を見開いた
私だけ！？騎士団のみんなは！？

女王様を守る女騎士団、私も素性を隠しているけど女騎士団の一んだけど、みんなとは年季が違う
女騎士団設立からいる人もまともじゃない！！
現にミララ隊長も目を閉じている・・・嘘でしょ！？
私は鞘から剣を抜いて、この人に突き付ける

「どういうことなの？なんでみんな目を閉じているの？」

威嚇しながら聞く
この人は、確実に私達女騎士団より魔力がある
ドラゴンを撃退した。そして、扉を召喚した
何もかもがおかしい・・・いや、魔力が多すぎるのかもしれない。
この人は・・・
一瞬でも警戒を解けない
もし、解いたならやられるかもしれない
だけど、この人は私を見ずに

「・・・やばいな・・・」

その一言だけ言って飛んで行った
嘘でしょ！？なんで私は見知らぬ土地で一人だけなの？
いや、正確には周りには、ヒルナやシーナがいる
隊長もいるけど、みんな目をつぶって動かない。しかもたったまま
どうしよう、ここで注意されていたモンスターが出てきたら
そう、考えている時だった

「コフーー」

鳴き声が後ろから聞こえた
恐る恐る後ろに振り返ると・・・

イノシシが、立っていた
しかも、棍棒みたいなものを持って
そして、その棍棒を振りかぶり私に・・・
当てるように、振った

ーーーブン！！

とっさに、私は剣でガードをしたが・・・

———バキン

音を立てて壊れた
この剣は決してもろくはない
ちゃんと毎日手入れをしていた
なのに、一撃・・・私の手もしびれて動かない
足もすくんで動かない

そして、イノシシは私の近くまで来て・・また、振りかぶった
私は目を閉じてしゃがんだ
そんなことで避けれるわけがない
だけど、とっさに体が動いた
なにもできない。こんなところで私は終わってしまうの？
ゆっくりと私にあた・・・

「はいはい、そこまで！！」

え？だれ・・？

———ドオオオン！！！

近くで爆発音が鳴り響く
どういうこと？
イノシシの攻撃がいつまでたっても来ない
私はいつの間にか目を閉じていたその目を開けたら
イノシシが倒れていた。しかも遠くの方で
あんなにもぶっ飛ばしたのか？
私の近くにはあの人と女騎士団、あと家が建っていた
目をつぶる前にはこんなものはなかった
・・・まさか

「ここまで運んであいつまで倒すの辛かったぞ？」

本当にやったんだ
こんな人間離れの技
すごい・・・なんて人なんだ

「さて、女騎士団とサーラ王妃を家に運ぶぞ？一応、この家、核兵器使われても壊れないからな」
「・・・名前、なんて言うんです？」
「は？」

突然だけど、気になった
学校で一度サーラ母様が言っていたけど、私は後ろの方にいたから
よく聞き取れなかった
だから、もう一度聞きたい。この人の名前

「そうだな。今は漆黒の無双って名乗っておくか」
「どういうこと？」
「お前の国ではこっちのほうが有名だからな」
「知らないわよ、そんな名前」

聞いたことがない、そんな通り名みたいなの
どうして、この人は隠そうとするんだろう・・・まあ、いいや

「私の名前はヴィクトリア＝ミーナ」
「へえ、王妃様の娘か」
「驚かないの？」

女騎士団のみんなは私の正体を明かすと驚いたのに・・・
なんでこの人は驚かないの？
私は、生まれたことすら隠していたのに

「大きくなったな・・・」

頭の上に手を置かれて撫でられた
気持ちいい・・・ただ、そんな気分になった

「なんで小さい頃のこと知っているの？」
「お前は覚えてないかも知れないけど、一度だけお前と遊んだことあるぞ？」
「え？」

どういうこと？
子供のころ一回も遊んだことはない。いつも勉強や魔法のことをしていた
なのに、遊んだことがある？

「もっとも、お前はまだ赤ん坊だったけどな」

そういうことか・・・でも、私を知っているんだ

何者なんだろう・・・この人
母様に頭を下げさせて、国を助けてくれって言わせたり、ドラゴンやイノシシを倒す力を持っていたり・・・何もかもすごすぎる
そう考えながら、私は目を閉じようとしたけど・・・

「おっと、寝るなら。家に入れ。全員入れといてやるから」
「はい・・・」

私は家に入り、靴を脱ぎ、そして、書かれていた自分の部屋に入って寝た
でも、私はまだ気づいていなかった。この家が見つかって少ししかたってないのに、私の部屋がいつの間にかあることに・・・

四話（前書き）

今回は、神彩剣吾（かみさやけんご）視点です

四話

はあ、やっぱりこうなったか
扉の世界は、召喚したものの望みを反映させる場合が多い
俺の場合、眠たいだ・・・だから、ここに入れば妙な睡魔に襲われる
しかもだ、召喚したものの魔力で強制させられるから、大体は寝る
さらには、モンスターも召喚したものの魔力に反映される・・・
まあ、勝手に家が建つからいいだけど、いちいち場所を探さないと
いけないのがきつい
そして、眠たい

「はぁあ～～～」

大きなあくびがこぼれる
ここで寝るわけにはいかないんだよなぁ
とりあえず、女騎士団を全員この中に入れてその後で、国でも救い
に行かないとな
王妃様に頭下げられたら助けないわけにはいかないからな
さて・・・やるか

――――数分後

「これで・・・最後っと！！」

1人1人、ソファに寝かせた
鎧を着ているけど、まあぐっすり寝ているから大丈夫だろう
あとは・・・

「扉の魔法・・・ムラトス！！」

開くのが、ストラム。閉めるのが、ムラトス・・まあ、逆に読めばいいから楽だ
まあ、その場合、他のやつらは扉から出ないといけないんだけど、この場合は閉じ込めるから便利だ
俺の視界では、世界が歪む。そして、扉の外の世界・・・現実が現れる
ついでに、閉じ込めて２４時間たてば自動的に召喚したものの近くに飛ばされる
よし・・・閉じ込めたし、ちょっと本気を出して、国を・・ラーシャ王国を助けるか
ラーシャ王国は、日本から俺の速度で、３分程度・・・
さて…やるか！！！

【ラーシャ王国】

―――ドカアアアン！！

悲鳴が突然飛び交う・・・すべて、兵士の叫びだ
俺としたらこんなめんどくさいことしたくないけど、まあやっといたほうがいいだろ

【王室】

俺はもう、到達していた
あの兵士たちは簡単に倒すことができた・・・正直、弱かった

「アーラ王！！奇襲です！！」
「うろたえるな！！この機会を待っていたんだろう！！あの女騎士団をつぶす・・・」

「いえ!!敵は・・・」

そして、後の言葉を聞いたアーラ王は言葉を失った
まあ、たった一人でここまでこられたら誰でも失うだろ

「1人・・・だと?」
「はい、しかも男との報告です」
「バカな!!そんなことが・・・」
「ありえるんだよ」

俺は地上から壁になっていた兵士たちを全員ぶっ飛ばして王様みたいなやつに近づいた
さて・・・とりあえず、本当の王様助けるか

「何もだ・・・貴様!!」

剣を引き抜き、俺に付きたてる・・・俺はその剣を一瞬にして折った
そして・・・耳元でつぶやいた

「前の王はどうした?」
「と・・・とっくに死んでいる!!」

死んでいる?まさか、女騎士団が去った後に・・・

「私たちはここが女が仕切っていると聞いたから攻めてきたんだ!!」

なるほどな・・・死んでいたのか・・・説明ご苦労さん
なら、予定変更だ。助ける対象の王様がいないなら、国を助ける
俺は王の耳元でこういった

「ここに来た、兵士を連れてされ・・・一応、言っておくけど一人でも残したら首が飛ぶと思えよ？」
「ヒ・・ッヒイイ！！！」

醜い逃げ方をして逃げ去って行った

―――ボエエエエ！！！

・・・多分、今のが合図だな
兵士の魔力が移動を始めた
これで、表面的にはＯＫ・・・
次は、捕えられている。元この国の兵士を助けるか
俺は弱っている魔力を探しだし・・・見つけた

【牢】

ここで、捕えらているみたいだな

「あなたは？」
「・・・まあ、正義の味方かな？」

俺は鍵を探すのが面倒だったから。近くにあったハサミを手に取り・・・

「ちょっと、下がってろ・・・スラッシュ！！」

スラッシュで牢の柵を切り裂いた。
はあ、こういう時だけ切れる刃を持っておいた方がいいと思うな。
俺・・・

「あ、ありがたい。やっと家族に・・・」
「さっさ言って言いふらしてくれ。国は救われたと・・・」
「は、はい！！」

みんな一目散に外へ出る
ここで、閉じ込められていたんだ。ストレスが溜まったんだろう
さて・・・ここからは、王妃様の出番だな・・・
俺はそう思いながら、外へ出た。いつの間にか外は夜だ
通りで眠たいはずだ
俺はそう思いながら、王の家・・・城に戻った
そこから、無意識のまま王のベットで寝た
それが、俺の人生で一番、最悪で最高の出来事の始まりだった

五話（前書き）

今回は、神彩剣吾（かみさやけんご）視点です

五話

「はぁあ～～～」

俺はあくびをしながら起きた
外はもう、夕暮れだ
ベッド何かきつさを感じる
おかしいな、確か広いベッドで寝たはずなんだけどな
俺は目をこすりながらベッドを見直した
そしたら・・・
数人の女子・・・ああ、そう言えば扉にいれっぱなしだったな
２４時間たって出てきたのか・・・って、この国どうなったんだろう
一応、昨日の内に助けたんだけど、でもその後どうなったか知らない
ちょっと、様子見に行くか
俺はそう思いながら、部屋を出ようとした
その時、不意にドアが開いた
誰だ？
そこにいたのは・・・

「おはようございます・・・新しき王」
「は？」

俺は耳を疑った・・・て言うか、目も疑った
俺の目が正常なら目の前には、メイド姿の女性がいる
俺の耳が正常なら、メイドは俺のことを『王』と呼んだ
・・・あれ？

「ああ、起きましたか」

横から、サーラ王妃が出てきた
いつの間に・・・
てっきりベッドにいると思っていた

「どういうことだ？サーラ王妃？」
「いやー、あなたが王になってくれた方が安定しそうだから国民に言っちゃった」

・・・まずい！！！サーラ王妃・・・酒を飲んでいる！！！
サーラ王妃は酔ったら何をしでかすかわからない・・・ついでに、俺が最後に見た時、絡み酒になっていってうっとうしかった
と、とにかく、王になるのはごめんだ！！逃げないと・・・

「あ、ついでに、前の学校には退学届。住んでいた場所はもう引き払って、あと銀行に溜めていたお金はすべて寄付したから」

・・・・・・・・・・・・

「うそだろおおおおおお！！！！！！」

早い！！早すぎる！！！対応がいくらなんでも半日以下ではできないことをやっている！！！
クソ！！ここまで、追い詰められているのかよ！！俺・・・・
金もない、住むところもない、学校も退学。
どうやって、これからの就活すんだよ

「あと、私の娘の・・・」
「ああ、ミーナだっけ」
「そうそう、その子と将来的には結婚してもらうから」

・・・何もかもがめちゃくちゃだ

「はあぁぁぁ！！？」

「いやだって、王族の人と結婚しないとのちのち面倒でしょ？」

「いやそうだけど」

一応、俺だって好きなやつぐらいはいる

・・・昔だけど・・・

「まあ、他に好きな子がいるっていうなら・・・」

「諦めてくれるか！！」

「その子も一緒に結婚しちゃばいいだけだし」

しまった！！そう言えば、この国重婚ＯＫの国だった（王のみ）

やばい！！すべての逃げ道をふさがれた！！

「一つ・・聞いてもいいか？」

「なに？」

「なんでこんなに手際よくできたんだ？全部、半日以下ではできない・・・」

「え？だって丸一日あったのよ？できるに・・・」

ん・・？おかしくないか？

丸一日？最低でもあの扉からは２４時間は出てこれないはずだ・・・

ていうことは

「俺が、二日寝ていたのか！！！」

「ピーポーン！！正解」

「いらねぇよ！！そんな正解！！」

「じゃあ、この書類にサインを・・・」
「やってられるか！！！」
俺は魔力を開放して、空を飛んで逃げようと思った
だが・・・
「・・・あれ？」
おかしい、何かがおかしい
体の何かがおかしい？なんだ？
「逃げられないわよ？だって、寝てる間に・・・魔力吸い取っちゃったから」
しまったーーーー！！！そうだ、この国、魔法関係なら世界一
俺の魔力を吸い取るのも造作もないはず
起きている俺ならなんとかするけど、寝ていたらなすがままだ！
っち！！奥の手を使うか？
いや、・・・この場合は、諦めたほうがいいか・・・
けどなぁ、王になるものいやだ
「なんで逃げようとするのよ？」
「ああ？」
「だって、王だよ？自分の好き勝手にできるのよ？こんな千載一遇」
「黙れ！！！」
自分でもびっくりするほどの大声がでた
だけど、許せない・・・
「王妃・・いや、サーラ！！あんたはそんなふうに国を使っていた

のか！？」
「ち、ちが・・・」
「違わねえだろ！！あんたは・・・」
「合格です」
「あ！？」

どういうことだ？合格？

「これで、文句はないですね？ミーナ」
「はい」

後ろから、声が聞こえた
まさか・・・この人達・・・

「試したのか？おれを・・・」
「そうです、ミーナがどうしてもって言うから仕方なく・・・」
「その割には、俺の魔力を」
「だって、逃げられたら駄目じゃないですか」

いつの間にか口調が戻っている
はめられた！！しかも、最悪だ！！
逃げられないし、はめられた・・・完璧に踊らされた
くそ、ちょっと考えればわかることなのに・・・

「だれか、助けてくれーーーーー！！！！！！」

五話（後書き）

次から、ちょっとわかりにくかったりするかもしれませんので、わかりにくかったらすぐさま言ってください。できるかぎり迅速に対応するつもりですので＞ｍ（＿＿）ｍ＜

六話（前書き）

今回は、ララミ＝ミララ視点です

六話

はっ！！聞いてあきれる！！
まさか、魔法関係の問題が解けないとは、ふぬけだな
この凡人はやっぱり王になるには、駄目な存在なんだろう

「はあ、体動かしてぇ～～」
「駄目だ！誰が何のためにこんな基礎の問題をやっているとおもんだ？」

私はなぜか教育係に抜擢(ばってき)された
正直なところさっさと終わらせたい。しかし、王妃様の命令では背くことができない
まあ、私ができる限りはやってやろう

「っで、こんどはどこがわからないんだ？」
「寝かせてくれぇぇぇ～～～」

・・・やりすぎてしまったか？
私が教育係に抜擢されて三日間ずっと眠らせずに勉強させているけど、効率が悪いか？
人に教えたことのないのに、なんで私がこんなことをやっているのだろう？

「・・・はあ、魔力も回復したし、本気で逃げようかな」
「そうだ、良いこと考えたぞ」

閃いた、こいつが私を見下しているのと、こいつの体を動かしたいという要求に見返ることができる考えを

「私と一騎打ちしないか？」
「・・・本気で言っているのか？」
目を見開いて、私に問い詰める
ふん。そんな脅しが私に聞くか

「本気だ」
「・・・まあ、準備運動ぐらいにはなるか」

なめられたものだな・・・仮にも私はこの王国では剣の達人として
名を知られている
そんな、私に準備運動ぐらい・・・ふふ、たのしみだ

――――――ガキィィン！！！！

「はあはあ・・・嘘でしょ？」

こんなにも強いのか？
今私・・・いや、私たちは戦っている
私達っていうのは、ここに来るまででこいつが女騎士団の暇なやつ
を誘い、一緒に戦っているが・・・こっちは6人いるのに・・・

「息ひとつ切れてないなんて」
「強すぎない？この人・・・」

近くにいる、マジシャン＝ヒルナも嘆いている

「はあ！召喚魔法・・・ケルベロス！！」

ヒルナの得意な召喚魔法で最も強力なケルベロスが召喚される
首が三つに分かれている犬、速さも力も十分だ
これなら、こいつも多少は・・・

「・・・ケルベロスか・・・」

一子相伝の強力な魔法がこいつに襲い掛かるが・・・

「よっこいっしょ！！」

―――ドカッ！！

殴った！！首の一つを殴り飛ばし、平然と立っている
そして・・・ケルベロスは消えて行った

「え？」

ヒルナは何がおこったかまだ分かっていない
・・・くそ！！ここまで実力の差があるか？
私たちは女騎士団・・・あの人が帰ってくるまでは、王妃様を守る・・・絶対に！！

「はあ！！女騎士団！！一気に行くぞ！！」
「「「「「はい！！」」」」」

私以外の騎士団が返事をした
それと同時に私たちは魔法を唱え始めた
６方向からの一斉魔法攻撃
さすがに、これは防ぎきれないだろ

「・・・本当に、準備運動くらいか」

――ヒュン！！

・・・え？

こいつが何かつぶやいてからいなくなった

どこに行った？

私は周りを確認すると・・・

「・・・・」

ヒルナが目を見開いて空中を見ている

私もそれにつれてみると・・・

六話（後書き）

ありがとうございます！！！
皆様のおかげでこの小説のお気に入り登録が１０件を超えました！！
それじゃあ、次回で・・・

七話（前書き）

今回は、神彩剣吾（かみさやけんご）視点です

七話

ここらで、ちょっと差を見せつけておいてやるか
俺は空中に飛んで女騎士団の包囲を抜けた
そのまま、右腕を上にあげて・・・
唱えた

「火炎の魔法・・・火球」

———ボッ！！

小さな太陽ができた
この魔法は、激しく自分の水分をなくす。まあ、太陽の近くにいるのとかわらないからな
でも、力を見せつけるにはもってこいの技だ
下の方で、騒いでいる
・・・はあ、なんで俺はこんな国の王になったんだろう
誰も、俺のことを信用はしていないはずだ
そこら辺から来たやつが突然王になったのに、はいそうですか。なんて言えない
まったく、サーラ王妃は何を考えているんだ
逃げようかな？

「ごきげんよう」

！！

「だれだ！！」
「おっと、それをこっちに向けないでください」

いつの間にか、近くにピエロみたいなやつがいる
・・・嘘だろ？全然気づかなかった
いや、それだけじゃない。なんでこいつは飛んでいるんだ？

「見つけましたよ。神彩　剣吾様・・・いや、悪神佐々柄（あくがみのささのがら）」
「・・・だれだ？そいつ、知らねえな」

訳の分からないことを言ってきた
・・・だけどわかることもある。こいつは俺を知っているし、強い

「ふむ、自分が誰だかわかってないようです」
「・・・どういうことだ？」
「いえ」

ニヤリと笑った
そして、ピエロの口が動いた

「すべての者に剣なる悪運（じひ）を・・・」
「な！！」

何が直観した
俺はこの魔法を知っているかもしれない
いや、魔法ですらないかも知れないけど・・・
やばいことだけはわかる

「防御魔法・・・アガーダ！！」

全体鉄壁魔法を唱えた
魔力がなくなっていくことがわかる

それもそうだ。だってこの国全部にかけた
そして、空から・・・剣が雨のように俺と町に降り注いだ

「ふふ・・・そんなちっぽけな魔法じゃ・・・だれも助かりませんよ？」

「・・・クソ！！！召喚魔法・・・黒魔の騎士！！！」

一瞬にて、召喚し・・・一気に！！

「うおおおおおお！！！！！スラッシュ！！！！！」

全力で、降り注いでいる剣にぶつけた
そしたら・・・

「え・・・？」

消えた・・・降り注がれていたはずの剣が・・・

「残念・・・幻覚です」
「しま・・・」

――――――ドス

・・・俺の体に何かが刺さった。いや、貫かれた
俺は目が虚ろになりながらもそれを見た
そこには、強大な剣が俺の銅を貫き・・・
俺は・・・落ちて行った

「・・・クスクス、さてこれから面白くなりますね」

・・・最後にピエロの声が聞こえたような気がしたが、俺の意識は
もう遠ざかって行った

七話（後書き）

すみません＞m（＿＿）m＜

佐々柄あたりなのですが、正確には、佐々［ささの］柄［がら］です

八話（前書き）

今回は、マジシャン＝ヒルナ視点です

八話

何が起きたか、わからない
一斉攻撃を仕掛けようとした私たちは、簡単に避けられた
そして、避けた神彩が小さい太陽を作っていたが・・・突然現れた
ピエロに負けて落ちてきている

「召喚魔法・・・バード！！」

私は得意のバードを召喚した
バードは人を運ぶことができる力持ちの鳥だ
落下している、神彩さまをなんとか支えないと・・・

「バード！お願い！！」

ほんの数分で、この国を救ったものが敗れた
・・・もしかしたら、私達騎士団は・・・弱いかもしれない
けど、この国を長年守ってきたんだ
この騎士団は、私はその騎士団で・・・戦っていきたい

【王の間】

「これは、一体何事です！？」

王の間には、王妃様がいる。その王妃様が見たこともないくらいの
驚いた顔で近づいてくる
団長が神彩さまを抱えている
ついでに、ピエロはいつの間にか消えていた

まるで、闇にまぎれるように・・・

「こいつは、いきなり現れたやつに負けました」

団長が答える

団長・・・仮にもこれからの王にこいつ呼ばわりは

「・・・う・・・」

!!

目を覚ましたみたい!!

よかった!!剣にさされている・・の・・・に

あれ?

おかしい、この人・・・誰だ?

「よかった。剣吾・・目を」

「下がってください!!王妃様!!」

「え・・?」

立っているのがやっとの剣吾様・・・いや、この人は違う。剣吾様とは何かが・・・

私の直感がそう呼んでいる

みんなは私を不思議そうに見ているけど・・・

「ふう。へぇ、俺様の魔力でわかるやつがいるのか」

「だれです?あなた・・」

「はは、一応、剣吾だよ俺は・・・」

「違う!!あなたは剣吾様じゃない!!」

この人は驚いた顔をした

絶対に違う。剣吾様とは・・・

「ヒルナ、一体何を言っているんだ？」

団長が私に問いかける

「団長は気づかないんですか？この人の魔力・・・弱すぎませんか？」

「は！？」

気が付いたようだ

それと同時にみんなが剣を引き抜いた

「はっは！やっとみんな気が付いたか・・・さて、本題に移ろうか」

「貴様！何者だ！！答えろ！！」

みんなが警戒している

しかし、この人はそれを者ともせずにしゃべり始めた

「本題はこうだ。俺にかかわるな。ただそれだけでいい」

「・・・？どういうことだ？お前にか、剣吾にか？」

団長が質問する・・・ていうか団長、名前覚えているじゃないですか

「どっちもだ。あと、この傷の心配はしなくていい」

私たちに見せつけるように、傷口を見せると、どんどんその傷がなくなっていっている

・・・どういうことだろう？この人と剣吾様・・・一体どんなかかわりが・・・

「さて・・・言うこと言ったし、俺はもう魔界に消えるは」
「・・・残念だったな。魔界への門は私達全員の魔力を注がないと開きはしないぞ」

そうだ、私たちは契約の元で魔界の門を封鎖している
魔界とは戦争中だが、戦力があまりにも大きすぎるため今は封鎖している

「だれが、わざわざ、魔界の門を使うって言った？」
「・・・・どういうことだ？」
「こういうことだ！！！」
「黙りやがれ！！！このクソ野郎が！！！！」

え・・・？なんだこの状況は・・・？
目の前に剣吾様がいる。二人も・・・
1人は、傷口がふさがっている剣吾様の形をしているものもう一人は・・・

「俺の体を好き勝手しているんじゃねえよ！！！」

黒い鎧に包まれている。剣吾様だ
これは・・・一体、どういうことだ？

九話（前書き）

今回は、神彩剣吾（かみさやけんご）視点です

九話

これは、一体どういうことだ？
剣に刺された俺はそのまま下に落ちた。そして、気が付くと周りには誰もいず、俺1人だけだった
傷口が開いてはいたが、そんなこと気にもせずに帰ると俺がいた
俺の形をした、別の魔力の俺が・・・
そして、やっと気が付いた。今の俺は、魔力体・・・魔力だけで動いている
何がどうなってこうなったかは知らないけど、このままじゃ魔力を消費していき俺は消える
・・・やるしかない

「おいおい、せっかく全員殺すチャンスだったのに」
「悪いな、だけど俺の体でやるな！！！」

答え返すとともに、切りかかる
本気だ、早く自分の体に戻らないとどんどん消えていく
幸いにも俺の魔力は高いから、消えるまでは時間がかかるはずだ
しかし、いつ消えるかはわからない・・・早く戻らないと・・・

――――ズシャ

「・・・自分の体なのにいいのか？」
「別にいいよ、俺の体ぐらいな」
「本気か。なら・・・」
「私達を無視するな！！」

――――ブン、ゴオオオ！！

俺の体が一瞬にして、火の海に飲み込まれた

「お前が本物だな？」

ミララが聞いてくる

まあ、こんなことが起きたから恐いんだろな

「ああ、そうだ・・・だから、手伝ってくれ」

「断る」

・・・まじかよ・・・

「じゃあ、王としての命令だ」

「断る」

・・・じゃあ、どうしろと？

「私たちは・・・王妃様を守る！！ただ、それだけ・・・」

「じゃあ、王妃様を連れて逃げろ。こいつぐらい俺1人でいい」

「何をいう？もう、相手の魔力が風前の灯じゃないか」

確かに、感じるところでは、魔力がもう少ないが・・・

「・・・いやな予感がすんだよ」

「ただ、それだけで私達を逃がすのか？」

「ああ、だからさっさと」

「安心しろ。止めはしない」

火の海に向かって走り出した

多分、あいつは俺の体を縛って動けなくすることだ
ミララが飛び込むと同時に全員が・・・

「待ってみんな！！」

いや、２人だけが飛び込んでいない
確か、名前がミーナとヒルナだ
あの二人は他のやつらと比べてまだ危険察知能力か魔力探知が優れているみたいだな

「ミーナ！ヒルナ！！お前らだけでも、王妃を守れ！！」
「でも、みんなが・・・」
「俺が全員助け・・・」
「うあああ！！！」

・・・！！！
人が・・・いや、女騎士団の一人が俺の方に飛んできた

———ガシッ！！

「きゃぁ！」
「う！！」

くそ！！魔力体だから力が入りにくい
俺は受けとめたのはいいが・・そのまま転がってしまった

「召喚魔法・・・ゴブリン！」

————ドン！

止まった！！
どうやら、何かにぶつかって止まったみたいだ

「コフウ・・・」
「ん・・？」

俺は見上げると・・鬼の顔があった・・・

「うあああああ！！！！」
「ちょっと！それ、私のゴブリンです！！」

・・・ああ！！そういうことか
ヒルナが召喚してくれたから止まったけど・・・さすがに至近距離
でゴブリンを見たらだれでもビビるって

「じゃあ、ゴブリンすまないけどこいつ頼むは」
「コフゥ」

うなずいてくれた
それをＯｋと思ったので抱きとめた騎士・・・シーナを手渡す
そして・・・

「とにかく・・・火の海を蹴散らす！！スラッシュ！！！！」

――――ブン！！

技だから魔力は減らない・・・だが、わかる
この黒魔の騎士を召喚しているから、どんどん魔力がなくなっている
だんだん、体が淡く光りだしてきた
早く、早く・・・

十話（前書き）

今回は、ヴィクトリア＝ミーナ視点です

十話

やばいかもしれない・・・
最初に会った時よりも剣吾さんの魔力がどんどんなくなっている
逆に、比例するように偽物の方の魔力は上がっていっている
このままだったら、負けてしまう
今は、剣吾さんがずっとスラッシュを使いまくっている
・・・前に言っていたスラッシュだけが魔力を消費しない技だって・・・
もう、魔力に余裕がないみたいだ
けど・・・偽物の方はなんで一回も魔法を唱えないのだろう・・・
今だってそうだ、吹っ飛ばした騎士の剣を扱ってスラッシュを防いでいる
何か事情があるのかも・・・
そう思い行動した

「はあぁ！雷撃の魔法・・・天激（てんげき）！！」

この魔法は雷の系統で一番、早く、ダメージもそこそこある魔法だ
これなら、距離をある程度とっている剣吾さんにも当たらない

「バカ！！やめろ！！」

剣吾さんから止める声が聞こえた

――――――バリバッリ！！

「ウガアアア！！！！」

命中した・・・けど・・・

「うあああああ！！！！！」

剣吾さんにも電撃が走った！！

なぜ！？

「剣吾さん！！」

「来るな！！」

「残念・・・遅い！！」

剣吾さんに向かって走り出した私の目の前に偽物が現れる

偽物が剣を私に向けて振った

・・・当たる。避けようもない・・・

しかも、偽物は狙ったかのように笑っている

・・・くやしい。こんなやつに殺されてしまうなんて・・・

――――ズバッ！！！！

・・・あれ？

切り裂かれる音がした・・・けど、私が切り裂かれた音じゃない

――――ドン

何かが地面に落ちたような音がした

いつの間にか目を閉じていた私は目を勇気を持ってあけた

そこに移った景色は・・・

鬼の顔・・・ゴブリンが私の代わりに切られいる姿だった

「邪魔をするんじゃねえ！！」

偽物が鬼のように怒った顔で剣を持っていない左腕で、ゴブリンを殴り飛ばした

――――バゴ！！

「ゴブリン！！」

後ろでヒルナの声が聞こえた

そして、ゴブリンの体は淡く光りだし消滅した

「・・・っチ、めんどくさいな・・・魔法で一気に殺させてもらうか」

そう言って、小さな声で偽物は詠唱を始めた

「雷撃の魔法・・・天激！！」

ついさっき、私が使った魔法が私に襲い掛かる

避けれない・・・死んでしまう、ダメージも相当な量があるはずだから・・・

・・・私はこんどこそ覚悟して、目をゆっくりと閉じたが・・・

「させるかよ！！！！」

また・・・同じように今度は剣吾さんが私の目の前に盾となろうとしていた

・・・いやだ・・・私が死ぬのはいいけどこの人が死ぬのは・・・

絶対に嫌だ！！

「雷撃の魔法！！天激！！」

剣吾さんが私の盾になる前に、私は魔法で抵抗した
多分、一秒も稼ぐことはできない・・・そう、確信しながら・・・

「召喚魔法・・・ケルベロス！！」
「鉄の魔法・・・ビックランス！！」

後ろから聞こえた・・・ヒルナとシーナだ
それぞれ、別のことをしている、シーナはビックランスを偽物の天激に当てた
ヒルナはそのまま、後ろから偽物にケルベロスをぶつけるみたいだ

――――ドゴオオオオン！！！

「くそ！！相殺か！！」
「甘い！！後ろにはまだ私達もいるんだぞ！！」

偽物の方から聞こえた・・・どうたら、ミララ団長は気が付きケルベロスと一緒に襲い掛かっているみたいだ
勝てる！！！その望みがでてきたと思った時だった

「さて・・・ここで、名残惜しいがフィナーレだ！！」

――――ドオオン！！

また・・・爆発音が聞こえた・・・相殺とかじゃない誰か単発でやったみたいだ
そして・・私は感じた・・・

嫌な魔力を・・・二つ・・・一つは、あのピエロみたいな魔力
もう一つは・・・別の方向・・剣吾さんがいたほうから弱弱しくも、
完全に光ではない・・ただの闇の魔力を・・・

十一話（前書き）

今回は、神彩剣吾（かみさやけんご）視点です

十一話

はあ・・・この状態にはなりたくなかったんだけどな・・・
そのために早く早くって思っていたのに
俺の着ていた黒魔の騎士が、さらに黒く染まる
それと同時に俺の魔力が完全な闇に染まる
魔力には、色があり、それによって使える魔法が異なったりする
例えば、ミーナは黄色。雷とかの魔法が得意なはずだ。しかし、俺は世にも珍しい純白の白
どんな魔法でも使えるし自分の意志で色を変えたりすることもできたりする。黒以外は
今のところ、色の種類に黒と言うものはないはずだ。しかし、なぜか俺は使える。ただし・・・今の俺に制御しきれるか賭けだな・・・
これは
俺の偽物もなにか変ったみたいだ
魔力の質が変わっていることがわかる。色は紫に近い青
ちょっとだけ似ている・・・俺を刺したピエロの魔力に・・・
だけど、ちょっとだけ違う

「さあて・・・やっと完全に復活することができたんだ。この国を滅ぼすか」
「滅ぼす？・・・なら、私達を倒してからにしろ！！」
もう、立ち上る気力もないくせに威張っている
はあ、ちょっとめんどくさいけど助けるか
「試してみるか・・・復活したこの力を！！毒の魔法・・・毒竜！！」

自分の体に毒の羽や角が追加される・・・おいおい、俺の体なんだけど
しかも、周りが毒霧みたいに細かい紫色に霧に包みこまれていやがる
多分、ちょっとでもすったらアウトだ・・・俺以外は

「はいはい。お疲れさん！！」

――――ドガッ！！

霧の中に入って、蹴り飛ばす！！・・・が

「ゴッフ！！！」

血反吐を吐いてしまった・・いや、魔反吐を吐いてしまった
猛毒の霧・・・ここまでか・・・。魔反吐を吐いてしまったため力が抜ける

「はっは！！まさかここまでバカだったのか貴様！」

俺の姿で高笑いしていやがる
結構イラつくなこいつ・・・俺の姿のくせに・・・ん？
俺の姿・・俺の体・・・なら・・・俺の体で一番苦手なもの。それを使えばいいんじゃないか？
立てるよな・・・？この魔力体のままで・・・ちょっとだけ持てばいいんだから・・・
俺は自分にそう言い聞かし、魔反吐でもう魔力が少ない体をゆっくりと持ち上げ、ミララが使っていた剣を手に取った

「おい・・・」
「なんだ？剣吾」

「名前なんていうんだ？お前の名前」
俺は自分の体を使っている奴の名前を知らない
もう、倒したら会うことはない。今の内に聞いておく
「名前か・・・そうだな、ソロモンって言うのはどうだ？」
「ソロモンか。わかった。じゃあなソロモン・・・安らかに眠れ」
―――ズッシャ
目にも止まらない速さで刃のついた剣で自分の体におおきな切り傷を作った
血が舞い散る音だけが聞こえる。俺の体から・・・
俺の体の唯一の弱点・・・血を見ること
多分俺が魔力体になるきっかけになったのもそうだ
俺の体に隙があって俺を押しのけてソロモンが入った
なら、同じようにすればいい・・・俺の体に戻るために、俺は自分で自分の体を切る！！
「あ・・・あああああ！！！！」
叫びながら魔力がどんどん弱まっていっている
俺の体が拒絶しているんだ。俺の体が・・・
ピエロに切られたときに俺の体を軸にしたのはいいけど、もう何十年の付き合いだ
俺以外のやつは拒絶しているんだ
俺は、待った・・・ソロモンが出ていくのを・・・
「ア・きえ…る・・・俺…ソロモンが・・・」
「だから、言っただろ？安らかに眠れって」

そして、俺の体から魔力は完全になくなり、俺が入って元通りになった
うん・・・やっぱり一番しっくり来るな俺の体が・・・
そう思った時だった

「あ・・・そう言えば・・血・・・出しっぱなしだ」

そう言いながら俺は意識が遠くなっていった

「剣吾さん!!」
「剣吾!」

騎士団のみんなが俺の名前を呼んでいることだけは・・・意識を失う前にちょっとだけ覚えていた

十一話（後書き）

これからも、頑張っていきます！！
あと、今回はちょっとわかりにくいと思った方はできたら、どこら辺がわかりにくいか指摘してください＞ｍ（＿＿）ｍ＜

十二話（前書き）

今回は、ララミ＝ミララ視点です

十二話

！！

倒れて言っている・・・剣吾が
魔力はおかしいが剣吾が倒れた
とにかく、傷口をふさがないと・・・
全身が血まみれだ・・・

「うそでしょ？・・・これ・・・」

シーナが驚いている
シーナは基本的に回復魔法を得意とする緑色の持ち主だ
どうしたんだ？

「傷口がわからない」

え？
どういうことだ？
傷口がわからない？

「とにかく、治療の魔法・・・シャイン」

緑色の光が、剣吾を包み込む
だけど・・・その緑色が・・・どんどん黒に染まっていく

「キャア！！」

何かの力に反発されたようだ

どうしてだ？しかも、聞いたことがない。
緑色の魔法がどんどん黒に染まっていくなんて

「あ・・・がぁ！！」

――――ブシャア！！

また・・・血が噴き出した
だけど色が・・・違う。赤じゃない・・・黒に近い緑色だ！！

「シーナ！大丈夫か！？」
「はい・・・なんとか・・・」

シーナから魔力を感じることができない
まさか、魔力を完全に吸収された？

「みんな！魔法は使うな。タンカで剣吾を運べ！」
「「「はい！！」」」

みんな返事のいい声で動き出す
・・・わかっている。運んでもらちがあかないことぐらいでも・・・
今できることだけは・・・絶対にやる！！

【王室】

「これからどうするの？団長！」
「とにかく、包帯で傷口を・・・」
「あ～～～駄目だ駄目だ。それじゃあ、剣吾死ぬぞ？」
！！

「だれだ！？」

警戒して叫ぶ

声の主は私の後ろにいた

短髪の金髪で、背は剣吾と同じぐらいある

そして・・・背と同じくらいのでかい剣を背中に乗っけている

「俺の名前は、三条（さんじょう）　森羅（しんら）。でもって、森火刃見（もりのひのはみ）だ。簡単に言うと剣吾の仲間」

「剣吾の・・・？」

なんだ？今の森火刃見って・・・

いや、そんなことより剣吾の仲間？聞いたことがないぞ？

だけど・・・

「どういうことだ？死ぬって」

「そりゃそうだろ。ていうか、変われ俺がやる」

・・・どうする？

確かに、見たところではこいつは治療の方法を知っていて、実行できるみたいだ

しかし・・・

「駄目だ。仮にも剣吾は私たちの王となる人・・・訳の分からないやつに任せることはできない」

断った

・・・楽はしない。絶対に私達で助ける

「そうか・・・なら、ちょっと痛い目あってもらうぞ？」

そう言って、こいつは剣に手をかけた

十二話（後書き）

誰だか、わかりませんが文章評価、ストーリー評価してくださって
ありがとうございます＼（＾ｏ＾）／

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9940z/

昔、魔界で無敵と呼ばれた魔法剣士が一国の王となりました

2012年1月13日18時56分発行